

カンガルーに当てないように ご用心！

松山 久秋

友人とオーストラリアのブリスベンに行き、7日連続でゴルフ。以下その体験記です。8月末、オーストラリアは冬から春に向かう時期。でも、寒くはなく、最低14℃、最高25℃位でゴルフに最適の気候でした。この時期、もっと南に下ったシドニーやメルボルンは寒くて雨続きだったようなので、ブリスベンに行って正解でした。

7日連続のゴルフに驚かれますが、二人乗りカートでボールの所まで行くので疲れません。8時頃のスタートで12時半頃にはラウンド終了。日本でハーフラウンドしたような気分で、疲れはありません。ブリスベンでは徒歩でラウンドする人はとても少なく、1割もいない感じ。イギリスやフランスではカートに乗る人よりも歩く人の方が多いし、米国でも平均的には3 - 4割の人は歩いていると思うので、徒歩でラウンドする人がほとんどいないのは、ブリスベンのゴルフの特徴の一つだと思います。

なぜ歩く人が少ないか？その理由はゴルフ場の広い敷地にありそうです。18ホールのゴルフ場で比較すると、ブリスベン近郊のゴルフ場は、多分日本のゴルフ場の2倍以上広いのではないのでしょうか。ですから、あるホールを終わって、次のホールのティーイング・グラウンドまでが、とんでもなく遠いことがあります。ブリスベンからゴールドコーストにかけて、昔は湿地帯だったそうで、平坦なコースが多いのですが、歩いて回るのは相当難儀そうです。グレッグ・ノーマン設計のコースとジャック・ニクラス設計のコースも回りましたが、

日本のように敷地を有効に使うという必要性は一切なく、広い所に勝手気ままに18ホールを配したという感じでした。

コースにカンガルーが出没するのには驚きました。カンガルーの一日は、日陰に寝そべっているか、草を食べているかですので、プレーの邪魔にはならないですが、たまにピョン、ピョンと、ゆったりと跳ねて移動します。ボールが当たることもあるので、彼らがグリーンを横切るまではプレーは小休止です。跳ねている姿がカンタス航空のロゴにそっくりですので、今度飛行場に行かれたら、チェックしてみてください。カンガルーがいたコースは、かつて、バブル期に日本のある大手銀行が多額の融資をして焦げつき、破綻の一因となった大規模リゾートのゴルフ場、サンクチュアリー・コーブ。絵のように美しいコースでした。ここの他にも日本のディベロッパがリゾート開発を行い、バブル崩壊後に二束三文で売り払って撤退した、そういうコースが何カ所もありました。

カンガルーの他にも、日本では見られない自然に溢れており、何種類もの珍鳥にお目にかかりました。鶴を少し小型にしたような鳥が、ゴルフ場だけでなくブリスベンの町中でも見られますので、写真を撮っていると、町の人に、どうしてそんな鳥の写真を撮っているの？と怪訝な顔をされました。電子音で鳴く鳥もいて、「ピー・ポー・ピー・ピ・ピ・ピ」と、まるで何かの信号音のように鳴きます。白黒のカラスもいます。白黒のカラスに、カートに積んでいたサンドイッチをさらわれました。忌々しいカラスめです。

残念ながら、コアラには会えませんでした。ゴルフ場にはユーカリの木が多いですが、コアラはオーストラリア全体で10万

頭程しかおらず、絶滅の危機にあるのだとか。カンガルーは何千万頭もいて、計画的に駆除しているそうです。クイーンズランド州オープンを最近開いたという山岳コースに行ったところ、林には「毒蛇に注意」の看板がありました。日本のマムシより何倍も猛毒なのだとか。ブリズベンよりもっと北のケアンズのゴルフ場では「ワニに注意」の看板があって、去年も、池に落ちたボールを拾いに行った人がワニに噛まれたそうです。まさに自然がいっぱいです。

電話でスタート時間の予約をし、「マツヤマ」と名前を告げると、“Oh, famous name!”と言われることがあります。去年、サンディエゴでゴルフした時もそうでした。ヒデキ・マツヤマのおかげで、ゴルフ場では「マツヤマ」の名前の通りが良くなりました。英樹君、ありがとう。今度“famous name!”と言われたら、“This is his father.”と冗談で言ってみようかな。

ゴルフには関係ありませんが、カンガルーの肉を食べました。最初に泊まったホテルの、ちょっとしゃれたレストランで、燻製のカンガルー肉がアントレにあるのを見つけました。脂肪の少ない赤身の肉でしたが、煙のにおいがきつくて味は分かりませんでした。



(子供がお腹の袋から顔を出している)